



城東図書館 2024年10月18日～11月20日実施

まちのひと 島 芳道さんの紹介本リスト

劇団未来所属

ふたつの家のちえ子

今村 葦子/著

評論社

【10歳のとき初めて読んだ、ものがたり】

おばあさんとおじいさんと暮らすちえ子は、帰る時間に友だちはお母さんが迎えに来るのを不思議に思っている。やさしいばあちゃんと「ばんしゃく」をするじいちゃんと三人の夜ごはん。けっきょく泣いて通えなかったようち園、がんばってみたけどもう少し時間がかかりそう。そんなちえ子をやさしく見守ってくれている。

古き良き、なつかしい、昭和のちいさなやさしい、おはなし。

はじめて読んだ長編、とてもせつなく、やさしい家族のものがたり。

数十年ぶりにあらためてページをめくると、大人の目線で眺める自分を再発見。

子どものときに読んでも、大人になってから読んでも、読み聞かせても、きっと間違いのない一冊です。

- 第37回芸術選奨・文部大臣新人賞。
- 第2回坪田譲治文学賞。
- 第24回野間児童文芸推奨作品賞。

蚩川・泥の河

宮本 輝/著

新潮社

【13歳のとき初めて読んだ、小説】

戦後の大阪、泥の河（安治川）河口で暮らす9歳の信夫とその友人たちのものがたり。

信夫は同じように貧しい環境で生活する友人・清太と出会う。清太は母親と共に船の上で生活している。その母親の「船の仕事」を理解できない主人公。

戦後古き良き、青臭い少年たちの友情のものがたりと期待して読み始めたら、そんなことはない。「貧しさ」と「社会の無常」が彼らの生活に影を落とし、ともに支えながら生きる姿を描く。汚くも美しい大阪弁でかかれた中編小説。

当時私も理解できなかったことが、今となってはあまりにつらく厳しい現実を目の当たりにした。この物語をきっかけに私は「小説」というものの面白さにのめり込んでいった。

1977年宮本輝作家デビュー作品。

第13回太宰治賞 1981年映画化もされた。

父の詫び状

向田 邦子/著

文芸春秋

【16歳のとき初めて読んだ、エッセイ(随筆集)】

戦前・戦後の少女時代のエピソードを中心に、日常の中で出会った物事やそれに関する原体験が綴られるエッセイ。いまでは考えられない古き良き昭和の強権的な父親を、小気味良く美しい文体で描いていく。

思春期のころ「小説」のすばらしさに目覚めていた私は、薄っぺらな家族劇を描いている（と思っていた）「向田邦子」なんてっ!、ましてや「随筆」なんてっ!? 読むような人間じゃないっ!? と、思っていたけど、手に取って読み始めた一冊。

それから向田邦子の作品を読み漁る結果になってしまった…。

短編集なので、とっても読みやすく、やさしい気持ちになれますよ。

梟の城

司馬 遼太郎/著

新潮社

【19歳のとき初めて読んだ、歴史小説】

戦国時代を舞台にした物がたり。主人公の伊賀の忍者・葛籠重蔵（つづらじゅうぞう）は、豊臣秀吉暗殺を企てる。徳川家康や服部半蔵、石川五右衛門など、実在人物も巧みに配置され、かげろうのごとき忍者の実像を描く。

最初の20ページの読みにくさに、何度となくあきらめていた本作品は中盤に差し掛かるともはやページから目が離せない。まるで目の前で戦闘が繰り広げられているのではないかと思う描写は映画見ているよう（1999年の映画化はもひとつやったかな…）。これぞ歴史スペクタクル。

司馬遼太郎が直木賞を受賞した長編第1作。

歴史小説のおもしろさを教えてくれた作品。

「二十箇月もの間子供を身籠っていることができると思うか」

「この世には不思議なことなど何もないのだよ」

戦後の昭和を舞台にすべての「憑き物」を落とすため、拝み屋・陰陽師の活躍を描いた妖怪ものがたり。妖怪+ミステリー+戦後初期、読み進めていけばいくほど煙に巻かれる感じが心地いい。

サイコロ本というジャンルを作った京極夏彦の非常に持ち歩きにくい一冊。

一度読み始めると手放せません。(文庫版もあるので、そちらが持ち歩きやすい)

ながっ、クドッ、漢字ムツカシッ、説明多っ…!?

でもすごいんです、おもしろいんです、説明しにくいんです、

注) 姑獲鳥(うぶめ)一夜間に飛行して幼児を害する怪鳥、中国の荊州に多く棲息し、毛を着ると鳥に変身し、毛を脱ぐと女性の姿になり、また他人の子供を奪って自分の子とする習性があるという。

「川向う」(和田澄子コレクションⅣ)

和田 澄子/著

松本公房

【劇団未来座付き作家和田澄子の処女作】

昭和30年代初頭大阪の郊外が舞台。雑貨屋の娘・和枝は青年団の社会的活動に参加し、団員の青年と恋をする。出自のことで差別を受け、苦労を重ねた母・しまは娘が傷つくことを恐れ、結婚に反対する。破談に直面した男女を周囲の若者たちや家族が支える、作者の実体験にもとに描かれた創作劇

劇団未来 和田澄子 22 歳のころに書いた初戯曲、1958 年演劇雑誌「テアトロ」掲載。

劇団未来 1972 年初演、2022 年再演。

劇団未来創立 60 周年記念公演No.1 と銘打ち、50 年の時を経て再演された本作品は劇団未来を代表する作品のひとつとなった。

「サド侯爵夫人」「わが友ヒットラー」

三島 由紀夫/著

新潮社

【劇団未来 次回公演作品】

「サド侯爵夫人」

18 世紀フランスの貴族サド侯爵の妻・ルネを中心に、彼の奔放な生活とそれに翻弄される女性たちの心情を描く。夫の非道な行為に耐え続けるルネは、愛と憎しみの間で葛藤し、最終的に彼を受け入れる決意をする。

「わが友ヒットラー」

ナチスドイツの独裁者アドルフ・ヒットラーとその側近たちの関係を描く。友人であったはずの人々が権力の前に次々と裏切られる様子を通して、信頼と裏切り、権力の残酷さを浮き彫りにする。

<二本立て>両作ともに、権力を持つ男性とその周囲の人々の複雑な心理と関係性を描いており、愛と憎しみ、信頼と裏切りが交錯するドラマが展開されます。どちらも人間の本質や倫理、権力の持つ影響について深く掘り下げる、

劇団未来第148回公演 大阪劇団協議会フェスティバル参加として上演いたします。

表示 4.0 国際 (CC BY 4.0)

転載等の際は “大阪市立城東図書館「まちのひとと文庫」推薦文”との表記を入れてください

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央 3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>